2017 年　東洋学園大学　卒業式式辞

　お堀端の桜の樹々のツボミが、ふっくらとふくらむ季節になりました。卒業生の皆さま、おめでとうございます。
　ご家族の皆さま、ご子弟の長い在学期間中には、いろいろなご苦労がおありになったことと、お察しいたします。皆様の支えなしには、卒業生一同、今日のこの日を迎えることはできなかったでしょう。心から御礼申し上げます。
　どうもありがとうございました。

　さて、卒業生の皆さん、皆さんは大学生として、あるいは大学院生としての最後の日を迎えます。そして、それは、あなた方の人生の「始まりの第一歩」でもあります。これまで、皆さんは東洋学園大学という学びの場で、教養を収め専門の学問を深めました。
　それは、まだ未消化のものも多いと思いますが、少しずつ消化しながら、新たな学びを、これからは一人で続けていかなければなりません。皆さんは「自彊ヤマズ」を学びの原点とする大学の、卒業生なのですから。自彊ヤマズは、自ら休まず、日々学び続けるということです。
　これからのあなた方の人生を意味あるものにしてくれるものは何でしょうか。まず、人を愛すること、周りを見渡して他人を思いやること、さらに一歩進めて社会に貢献すること、自分の生きる目的を創り出していくことが必要なのです。

　本日、私は、教養のもつ力について、お話ししたいと思います。
私たちは時代の流れに押し流されない、本物の教養を身に着け、批判的思考力を養い、物事の本質がどこにあるかを見抜く観察眼を育てていかなければなりません。
　教養人として必要な、物の本質を見抜く目はどうやったら身につくのでしょうか。それは本物に出会い、触れることです。
　私は青春時代、ピカソ展があるというので上野まで出かけました。長い行列に並び、初めてピカソの絵を目にしました。
　パネルの片隅に、ひっそりと「カサヘマスの死」という絵が、かけられていました。見た途端、私の心にキーンという共鳴音が鳴り響きました。突然亡くなった親友のカサヘマスが棺の中に横たわっている、静かな絵なのですが、取り残された画家の抑えきれない感情、静かに燃える炎のようなものが心に突き刺さりました。
　これが本物のピカソとの出会いでした。親友の不幸な突然の死に衝撃を受けた彼は、これまでのきらびやかな色彩を封印し、青の時代に入ります。この絵はピカソが死ぬまで公開されなかったのです。
　それから、私は夢中になってピカソの自伝を読み、天才のエネルギーに圧倒されました。私はどうしても、ゲルニカが見たくなりました。スペイン内戦中のゲルニカの街がドイツ空軍によって無差別爆撃を受けた様子を描いた壁画です。マドリードのプ

ラド美術館まで、わざわざ旅行しました。なんということでしょう。「ゲルニカ」は、その時、ニューヨークに貸し出されていました。

本物との出会いは、次々と新しい出会いを求めないでは、いられなくなります。これが教養を求める心なのだと思います。

グローバル化の波が日々押し寄せてきていることを思い出してください。無関心でいてはいけません。皆さんが生きている世界の出来事に関心を寄せ、次の世代に自分の生きた時代を伝えることができるような生き方こそ、今を生きるということです。

世界で何が起こっているかをしっかり見つめ、その中で自分の立ち位置を決め、覚悟を決め、理不尽なことを背おわされている人に寄り添う気持ちを忘れないようにしてください。

それが教養を養うということです。教養とは生きる力、自分の身の回りを観察する力です。その教養は知識を求めるだけでは、充分ではありません。知識が経験に裏打ちされた時、それこそが、教養という大きな力になるのです。

私の中で忘れられない悲しい出来事があります。

1989 年 6 月、中国で起きた天安門事件です。自由に目覚めた中国の若者たちが、強大な国家権力に立ち向かいました。鎮圧のために北京の天安門に戦車隊が入ってきました。そのときです。買い物袋を下げた一人の市民が戦車の前に立ちはだかって、大きな戦車をとめてしまいました。やがて男は、私服の男たちにかこまれ、何処かに連れ去られました。

テレビを見ていて、私はその人の勇気に鳥肌が立ちました。

たまたま、その日、中国からのお客さんが、わが家に泊まっていました。私たちは、一緒に夢中でテレビの画面に、かじりついていましたが、やがて彼は新聞を手に、黙って寝室に入っていきました。彼の部屋からは押しつぶしたような泣き声が漏れてきます。なんと声をかけたらいいのか、言葉も見当たりませんでした。

でも、彼の祖国を思う気持ちは、共有できたと思います。私はその夜、論語の中の言葉を思い出していました。

孔子のお弟子さんが聞きました。「生涯私が行うべきことを、一文字で表せるでしょうか」。孔子は言います「それは恕だな（恕とは思いやりの心です）。自分が他人から受けたくないことは、他人にもしないことだ」と。

思いやる心が教養だと思います。学んだからこそ、思いやる心が養われるのです。人が人を思いやるという気持ちがあれば、世界はもっと生きやすくなるでしょう。もちろん、それは簡単な道ではありませんが。

そして、戦車の前に立ちふさがる勇気は、強い、人生をあきらめない心を養うことで生み出されます。これも教養です。

私に諦めない心を植え付けてくださった人は、学生時代の恩師であるシェイクスピア学者の橘忠衛先生です。先生は、学問に対しても学生に対しても、厳しい姿勢を持ったかたでした。私は先生から読書することの大切さと、楽しさを教わりました。新

しい本との出会いを楽しそうに語られる先生の人なつこい笑顔が忘れられません。先生は、神保町の古本屋街を毎日歩いておられました。私も先生と一緒に、よく古本屋街を歩き回り、先生と店の主人との会話から、どこの本屋にどんな本が置いてあり、今どんな本を読まなければならないかを学びました。

「学生は、本を読むことです」と言うのが先生の口癖でした。１週間、本屋に行かないとひどく怒られたものです。人に、ものを教える教師としての姿を、先生から教えられました。私が初めて教壇に立つとき、先生は「うそは教えるな」。「知らないことは恥ではないんだよ、調べてから教えればいい」と背中を押してくださいました。

のちに論語の中にこんな言葉を見つけました。

孔子が言います「お前に知るということを教えようか。知ったことは知ったこととし、知らないことは知らないこととする。それが知るということだ」

私は橘先生から、何かを決断する時には、「一つの事象の行き着く先をしっかり推測して、つまり未来を見据えて」決断しなさいと、教えられました。それこそが教養の力だと思います。先生との出会いは、計り知れないほど私の人生を豊かにしてくれました。そのひとこと一言が私の生きる指針になりました。橘忠衛こそ、教養の人でした。

皆さんにも本学の学びの中で恩師との出会いがあったと思います。まだまだ、皆さんが自分の潜在的可能性に気づいてもいないときでさえ、先生方は「粗削りではあるけれども、磨けば輝く宝石となる」原石が、誰の中にもあることを信じて、皆さんを見守ってくれていたのです。先生方の一言で救われたり、考え方が変わったりしたことがありませんか。皆さんの学びの周りには、先生方や職員や、多くの仲間がいたことと思います。友人たちに見守られながら、共に学びあう中で育ててきた協調性こそが皆さんの大事な宝物です。

私は恩師の思いを胸に、教師として歩き出しました。皆さんも、本学での学びを胸に、明日からの社会人としての第一歩を踏み出してください。踏み出すにあたり、心しておかなければならないことは、社会人になったら、日々決断を迫られるということです。

私たちの前には、常に二つの選択肢がおかれています。進むか、さがるか、「ハイ」か、「イイエ」か。どちらかを選ぶ決断をしなければなりません。決断はあなたの明日を決めます。その決断を支えてくれるものが教養の力なのです。本学での学びの中で、皆さんは幅広い教養を身に着けたことと思いますが、それをさらに深めていかなければなりません。

これまであなたの心に響いたことを思い出してください。

何かに触れた時に、キーンと体中に共鳴音が鳴り響いた経験を誰もが持っていると思います。読書をしても新しい知識を得たとき、この共鳴音が鳴り響きます。

共鳴音を追いかけるような読書をしてください。

読書から得た知識を、経験が裏打ちをしてこそ、真の教養が身につくのです。人類がこれまで獲得してきた英知を学ぶ力、ただ知識として人類の遺産を受け取るだけでは十分ではありません。

知識が社会に出て実践という経験に裏打ちされた時に、初めてそれはあなたの本物の教養になり、あなたに生きる力を授け、あなたの生きるべき道を教えてくれます。

それでも決断を間違えることもあるでしょう。長い人生の中で失敗はつきものです。自分なりに精いっぱいの選択をしたのですから、それでいいのです。失敗も一つの経験です。いくつかの失敗は、次の人生へのジャンプ台にもなります。ジャンプ台に飛び乗って思い切り足で台を蹴ったら、全く違った世界観が広がるでしょう。

失敗したときになぜ失敗したのかを自分に問いかけることも忘れないでください。私は学生たちに、いつも授業の中で、自分と周りの世界に「なぜ？」「なぜ？」と質問をしなさい、そして答えを探しなさいと言ってきました。この質問する力こそ、あなたを本物の教養人にしてくれます。毎日ひとつ、質問を自分に問いかけ、答えを探しましょう。

あなたの心の深みにある直観を呼び起こし、自分が共鳴できる本に出会ってください。きっと本物を見抜くあなた独自の観察眼が育っていきます。これは誰も手伝ってくれません。自分の内側から育てるものです。何より大切なのはやり遂げる情熱を持ち続けることです。

情熱さえ失わなければ、何度失敗しても、挑戦し続けることができます。続けていれば、いつか、やり遂げる日が来ます。断念した瞬間に、それは永久に成就しなくなるのです。

今、あなた方は、一つのことを成し遂げて今日を迎えたということを忘れないでください。そして、社会へさっそうと旅立つあなた方を前にして、在学中のあなた方の学びに敬意を表しながら、あなた方、ひとり一人に、私は強い誇りを感じています。

春の訪れの中で、
これから花を咲かせようと、必死になってわが身を膨らませている桜のツボミに、
いつも感じる命の躍動感を、皆さんに感じます。

どうぞ、あなたの素晴らしい人生行路を、旅してください。
皆様の健康と、幸せを、心からお祈りして私の式辞といたします。

平成 29 年 3 月 20 日　　　東洋学園大学学長　原田規梭子